

第1回 新たな都市像検討委員会

議事概要

■日程・場所

日時：令和5年4月26日（金） 14:00～15:00

場所：金沢市役所第一本庁舎 全員協議会室

■出席者名簿（敬称略・五十音順）

役職	所属等	氏名	備考
委員長	金沢大学 学長	和田 隆 志	
委員	金沢商工会議所 会頭	安 宅 建 樹	
	金沢工業大学 情報フロンティア学部学部長 メディア情報学科 教授	出 原 立 子	
	金沢市社会福祉協議会 会長	桶 川 秀 志	
	（一財）石川県芸術文化協会 理事長	久 保 幸 男	
	（一社）金沢経済同友会 代表幹事	砂 塚 隆 広	欠 席
	ダイヤ精機（株） 代表取締役 内閣官房 新しい資本主義実現会議 委員	諏 訪 貴 子	オンライン
	金沢市公民館連合会 会長	竹 上 勉	
	金沢学院大学 教育学部教育学科 教授	田 邊 俊 治	
	未来へつなぐ金沢行動会議 代表	谷 口 亮 輔	オンライン
	石川工業高等専門学校 副校長 建築学科 教授	道 地 慶 子	
	金沢市町会連合会 会長	中 川 一 成	欠 席
	金沢まちづくり学生会議 メンバー	村 山 愛 乃	代 理
	金沢市校下婦人会連絡協議会 会長	能木場 由紀子	
	（一社）金沢市観光協会 副理事長	八 田 誠	
	（独）都市再生機構 東日本都市再生本部 副本部長	松 永 浩 行	
	金沢大学 融合研究域融合科学系 教授	眞 鍋 知 子	
	東京女子大学 副学長 現代教養学部国際社会学科 教授	矢ヶ崎 紀 子	オンライン
金沢美術工芸大学 学長	山 崎 剛		
事務局	金沢市長	村 山 卓	
	金沢市副市長	新 保 博 之	
	金沢市副市長	山 田 啓 之	
	金沢市都市政策局長	村 角 薫 明	
	金沢市都市政策局企画調整課長	津 田 宏	

■次第

1. 開会
2. 市長挨拶
3. 委員長の選任
4. 議題 10年後の金沢に向けた意見交換
5. 閉会

■配布資料

<資料1> 意見要旨取りまとめ（委員提出資料）

■会議概要

1. 開会
2. 市長挨拶
3. 委員長の選任
4. 議題 10年後の金沢に向けた意見交換

安宅委員：・金沢は観光スポットが中心市街地に集積しているが、商業的な観点から見ると、郊外に次々と大型のショッピングセンターが開業し、中心商店街が苦戦している。シャッター街とならないよう、まだ活力があるうちに、中心商店街が賑わうまちづくりが必要である。

- ・片町商店街をはじめ中心商店街の老朽化した建物への対策が必要であり、市には、商店街への全面的な支援に取り組んでいただきたい。

出原委員：・今後の就労人口の減少に向け、子育てや介護等と仕事を両立しながら働く世代や、障害のある人たちが利用できる、オンラインやメタバースを活用した労働環境の整備や、遠隔操作ができるアバターロボット等を活用したテレワークの推進が必要だ。仕事環境のDX化を進め、従来の働き方に捉われない多様な働き方が認められ、実現できる都市になることを期待する。

- ・若い優秀な人材の集積も重要であり、特にIT等の先端技術を有する人材が働きたいと思う職場や仕事を創っていく必要がある。産官学金の連携のもと、学生を含めた共同研究の実施や、さらには連携先への学生の就職という流れも考えられる。
- ・働く環境と豊かな文化体験ができる生活環境が一体となった、仕事場や余暇を楽しめる場、住まいが近くにあり、ライフワークバランスが実現できるコンパクトシティが目指す姿である。

桶川委員：・超高齢化社会を迎え、支えが必要な人が増加する一方で支える人が不足する。こうしたなか、ITを活用した福祉の基盤整備・構築が重要である。例えば、電子地理情報システムに各種情報を突合することで、地域課題の把握やマルチスケールで解決策の検討ができる。また、SNS等により支援が必要な人とボランティアとの迅速なマッチングも可能となる。

- ・一方、福祉は人と人のつながりによるものであり、民生委員だけでなく、多様な人が参加する社会づくりが大切である。ボランティアだけでなく、コミュニティ・ビジネスのモデルを検討することも重要である。
- ・全世代への「福祉教育」を充実すべき。SDGsのゴールの1つに福祉が含まれており、SDGs普及を図るなかで福祉への意識も高め、子どもたちの健全育成、物事を解決し生きる力を育む取組に繋げる。
- ・国を挙げ、日本中の各都市が子育て環境づくりに注力しており、移住促進施

策のひとつにもなっている。戦略的に子育て支援策を考えることが重要である。

久保委員：・他都市と比べ、金沢ほど、歴史・伝統文化を継承している都市は少なく、携わる人たちの人間性がまちの雰囲気醸し出している。伝統文化、礼儀作法、教養、向上心、向学心を身につけていることが大きく影響している。市では、子どもの頃から文化に触れる機会の創出として「子ども文化体験ワールド」を開催しており、好評だ。このような機会の充実が、金沢の魅力につながる。

- ・金沢は、茶道において、必要な道具やお菓子が全て揃う稀有なまちである。こういったものを中心に伝統文化を市外の方にも分かりやすく広めていくことが、文化観光の推進においても有意義であり、将来の金沢の魅力につながっていく。

諏訪委員：・現在、産業の変革期が訪れており、企業のDX支援、AIの活用支援はもちろん、新産業への転換を図り成長分野への参入支援が必要となる。また、起業支援や企業誘致を行い、金沢らしい強みを生かした仕事の創出が必要である。強みは、自身では気付かない部分もあり、市民とともに自慢できる場所を声に出していくことが必要。行政と市民という目線の違いによっても、強みは違ってくるため、違いの中から真の強みを見出し「誇れる金沢市」をつくっていただきたい。

- ・学校教育の場において、キャリア形成の講義を設け、様々な分野の企業経営者や幹部より、どのようにキャリアを積んでいくか、子供の頃から学ぶべき。国の施策でも提言している。これまでは、転職を繰り返すことをよく思わない風潮があったが、今後10年はそれをキャリアとみなし、スキルを向上させていく世の中になっていくため、キャリア教育は必須になる。
- ・成長分野への企業誘致を積極的に行い、求職者に求められるスキルの向上、つまり、リスクリングを全世代に対し支援していくことが必要である。

竹上委員：・公民館は「集って、学んで、つながる」の3つのキーワードで表現されており、10年後を考える際に人材育成はとても重要である。気軽に集まって学ぶことが基本であるが、特に専門性を持たせる学び、例えば、松下村塾のような将来を見据えた人材育成システムがあってもよい。若い人たちに刺激を与えることで、面白いアイデアが生まれ、また、10年、20年先に活かされる要素が生まれていくだろう。

- ・人材育成においては、特に20代の学生に向け、刺激のある道を示すことが重要である。若い人材に専門性を持ってもらうため、大学だけではなく専門性のある方による、少人数体制での魅力ある学びの場が必要である。

- 田 邊 委 員：・子どもたちの学習内容は常にバージョンアップされており、それをさらに知財創造や価値創造といった方向に、高みを目指した学び文化へと展開できるものでありたい。知財創造や価値創造というと、これまで世の中になかったものを生み出す一面があるが、新しい見方や新たな気づき、さらにはこれまでになかった組み合わせ方で新たな価値を創り出していくといったように、より発想を広げた学びの文化へと展開できるようになるとよい。
- ・金沢市には、「高峰賞」「岡文化賞」といった、優れた子ども達を表彰する制度がある。優れた発想や取り組み方など、表彰者の思考プロセス、実行力や修正力にも着目し、取り組みの過程を広く共有することで、子ども達が科学的かつ論理的な思考を大事にしながら実社会の中での生き方にも生かせるようになるとうい。
 - ・金沢市には、その道の先輩や達人、伝統の継承者等といった多様な分野の優れた人材が豊富である。豊富な人材の経験や知見を子ども達の学校や地域での学びにつなげていくことで、人づくりによる次世代への継承がより豊かに展開できるようになり、そのためにもより系統的かつ効果的な手立てが必要である。
 - ・国際的にみて、日本の若い世代は自己有用感や自己肯定感が低いとされている。将来に夢を持って取り組めるような学び文化の土壌がより確かなものであってほしい。
- 谷 口 委 員：・令和4年度に発足した、「未来へつなぐ金沢行動会議」では、各テーマにおいて、次のような取組を検討している。
- ・魅力づくりに関しては、若い世代に、金沢の文化芸術に対して愛着を持ってもらうための取組や、ずっと金沢にいたくなるような横断的プラットフォームの構築を検討している。
 - ・暮らしづくりに関しては、ボランティア同士の結びつきの強化と活動を周知するためのイベントを開催するために情報を集めている。
 - ・人づくりに関しては、教育イベントの広報や第3の居場所である「ユースセンター」の周知、先行事例の調査、民間と学校の協働についての検討、既存の産前産後継続・周知の支援が必要であると考えている。
 - ・仕事づくりに関しては、金沢で活躍中の、30歳代以下の世代で面白い活動をしている人物をピックアップしたコラボイベントを検討している。
 - ・都市づくりに関しては、“ウォークブル”なまち金沢を目指して公共交通の効率化とパブリックスペースを充実させ、どんな人も出かけたくなるまちになれば良いと考えている。
 - ・これらに加え、広く意見を集めるための方法を変える提案を4つさせていただく。1つ目は、5W1Hをまとめた意見書や企画書をフォーマットとしてまとめること。2つ目は、希望性で後追い可能な連絡先を記入することで、

言っただけで終わらず、後追いができるようにすること。3つ目は、半分行政・半分民間のプロジェクトチームを発足すること。4つ目は、各プロジェクトがオープン化されることで、市民に具体的な進捗を可視化することを提案する。

- 道地委員：・ここ十数年、金沢市は、中心市街地や魅力ある都市の空き空間について、外部から評価を受けているが、空き空間を活かすための職住遊のバランスが取れた空間づくりが実現できていない。また、豊かな空間に集うためのアクセシビリティの整備も実現されておらず残念に感じている。
- ・住に関しては、金澤町家を大切にしており、様々な施策を講じているが、居住促進対策の具体案が見えてきていない。
 - ・職に関しては、県内に学生が多い反面、卒業すると県外に流失している。学生へのアピールや企業へのサポートを充実させていく必要がある。
 - ・憩いの場は、賑わいの創出だけでなく、有事の際の防災や避難の大切な空間でもあるため、中心市街地で働き、住み、憩うまちを実現していただきたい。

- 村山代理：・まちなかに学生を呼び戻したいという施策は多数あるものの、石川、金沢の学生全体には合っていない。幅を広げても良いと感じている。新大学1年生を対象に開催したイベント「オープンシティ in KANAZAWAZA」にて、県外出身の学生に伝統文化を体験してもらったところ、大変興味を持ってもらった。伝統文化の良さを広く学生に理解してもらうことで、文化の保存や学生への良い影響につながるだろう。
- ・「いしかわシティカレッジ」など、自分の学びたい事を学べる環境にあり、また、「協働のまちづくりチャレンジ事業」など、学生や市民に対するサポートが充実していると思うが、認知度向上が課題である。情報が行き届かず、利用できていない学生も多くいるため、広く認知できるとよい。
 - ・バスの利便性が悪いと感じる。観光客に対しては、周遊バス等便利だと思いが、バスセンターのような、バスを一度整理する場所の整備等により利便性が向上できるとよい。

- 能木場委員：・金沢市校下婦人会連絡協議会内部でも高齢化が進んでいるが、子育てについては大先輩が多く在籍している。様々な地域の諸団体と連絡、連携をしながら子育てに協力できたらと考えている。
- ・転勤等で金沢に来る方を良くお世話している人が婦人会の中にいると聞いている。移住者のお世話をしながら人口増に協力をしていきたい。
 - ・若い世代が金沢の良いところを理解し、金沢で子育てをして住み続けたいといった方のお手伝いも私たちの役割だと考えている。

八 田 委 員：・今年3月末に国の観光推進計画が改定された。外貨獲得という点で、観光の位置づけが高くなり、単に客数を追うのではなく、消費額の方に着目している。特に、地方部での宿泊数増加がうたわれており、金沢がモデル都市となりうる。認知度をさらに向上させていくために、コア・バリューが必要である。

・2021年の調査では、金沢はミシュランの星付きレストランの数が、世界で14位であり、新鮮な食材がそろい、確かな料理の技術、器や盛り付け、しつらえなど、食の総合芸術たる料亭が多くあるほか、星付きのレストランも多いまちである。スペインのサンセバスチャンのように、世界の美食の都を目指して、「美食のまち金沢」をブランド化していけるとよい。

松 永 委 員：・地域経済圏の内部に注力する政策と外部と関係性の中で強くしていく政策との2つの側面で整理していくことが必要である。

・都市構造インフラ関係の側面では、金沢駅西側と東側で大きなまちの構造の違いがあるため、交通政策も含めた対応が必要である。特に、香林坊を中心とした中心市街地の交通と、駅西側等でのダイナミックな交通の考え方も含めた交通政策のあり方は異なると考えられ、今後議論していきたい。

眞 鍋 委 員：・「金沢方式」は、地域主導、ボランティア、地元負担の3点セットで、地域団体が地域を運営する方式で、金沢のコミュニティの土壌が強く豊かである理由のひとつともされている。この「金沢方式」に、地域はとらわれ続け、行政も甘えてきた側面がある。10年後も町会を中心とした地域コミュニティのつながりや、支え合いが現状よりもしっかりとした形で、地域の人々を誰一人取り残すことなく維持されていることが望ましい姿であり、このようなコミュニティは、地域福祉や防災防犯等の地域の課題を解決するためのセーフティネットともなる。

・現状の「金沢方式」を「金沢方式 1.0」とするならば、今後10年を見据えて金沢方式の財産を引き継ぎつつ、「金沢方式 2.0」として中身をアップデートする時期に来ている。特に、地元負担を見直すとともに、新たな地元主導、ボランティアの仕組を整え、それを「金沢方式 2.0」として広めていくことを提案する。地元主導という理念はそのままに、ボランティアの仕組については、住民だけではなく、事業によっては企業やNPOなどの参画や個人が準町会員のよう形で関わる仕組など、若者、女性といった現状では町会活動に関与が少ない層を取り込む形にアップデートしたい。

・地域と学生等との協定により実施する、学生等による「雪かきボランティア事業」が長年継続されているが、例えば、除雪だけではなく防災についても活動領域を広げるなど、今以上に若者、学生を地域自治にも巻き込んでいきたい。

矢ヶ崎委員：・都市の活力を維持していくためには、国内外との交流が欠かせない。観光という交流を生む手段を上手に使いこなす、世界の観光目的地・金沢であってほしい。観光というツールを使いこなすためには、観光地域づくりや観光需要をマネジメントしていく必要があり、そのためには、主要なターゲットを定めていく必要がある。世界に通用する金沢には、所得だけでなく教養面においても豊かな方々に来ていただき、金沢に尊敬の念を持っていただき、金沢のファンになっていただくことが重要である。

- ・観光は産業としても重要であり、他産業にも貢献する観光産業になっていくことが重要である。金沢であれば、MICE等の国際会議の受入れについても産業として対応できるだろう。
- ・観光分野だけでなく、全ての産業分野において人材不足の状態が続いていくことが懸念されている。都市の中で人材を取り合うのではなく、外から金沢で観光ビジネスを行いたい若者を惹きつけるようになることよ。

山崎委員：・アーティストがいきる、いかされるまちになってほしい。「いきる」には、生命の「生」と活動の「活」の漢字があてられる。多くの工芸作家の方々や、金沢21世紀美術館が存在するものの、金沢が持つ歴史的な遺産やポテンシャルからするとまだ不十分な部分があり、そこが補われ、強みになっていくことを願う。

- ・住まうということについて、定着することにあまりフォーカスしすぎない方が良く考えている。流動性が活気を生むため、住んでいる人、金沢に来て活動をする人の芸術面での関係人口の増加に注力することが重要である。その観点から、従来の文化芸術組織に対する支援に加え、個人事業者としての芸術家等（美術・工芸・デザイン・音楽・演劇・古典芸能等の担い手）の活動基盤に対する環境整備が重要である。日本の芸術文化行政の中で、個人に対する活動基盤の支援はかなり遅れているため、他地域に先駆けて金沢が行うことが重要である。アーツカウンシル金沢がこのような支援活動を行うことが重要であり、金沢モデルを提示できるとよい。
- ・金沢美術工芸大学が金沢の魅力づくり、仕事づくりに関連する人づくりに注力し、貢献していくことが望まれていると自覚している。

和田委員長：・2021年10月に県内の高等教育機関の集まりである、大学コンソーシアム石川が「金沢文化・学術研究開発都市未来構想」を公表した。学術研究機関の集積を中心として、日本海側最大級のサイエンスシティを目指すことを掲げている。こうした動きも踏まえ、金沢市の今後のまちづくりにおいては、歴史・文化・学術・医療と最先端研究を融合、文字通り産学官金連携を深めることが重要である。まち全体が輝くイノベーションの基盤となることが重要であり、ここには人材育成や学びが含まれ、文化・学術が展開していけるまちづくりが

進むことを願う。

5. 閉会